

先人の知恵から

36

かうんせりんぐるうむ かかし

河岸 由里子

気が付けばもう5月という時の流れの速さに呆然とする日々である。よくもまあ飽きもせず続けているなど自分自身に感心しながら、矢張り最後までやり遂げたいと思っている。ようやく「さ行」の終わりに至った。辞書で見ると半分くらいは来ているか。意味が重なる諺も多いことから、今後は進みが早くなるかなと思っている。

今回は「せ」のところから以下の9つ。

- 急せいては事を仕損じじる
- 性せいに率しだう、之これを道みちと謂いう
- 生せい年ねん百ひゃくに満みたず、常つねに千歳せんざいの憂うれいを懐いだく
- 生せいは難なんく死しは易いし
- 性せいは猶なほ湍たん水すいのごとし
- 精せいを得えて塵ちんを忘わする
- 赤せき心しんを推おして人ひとの腹はら中ちゆうに置おく
- 積せき善ぜんの家いえには必かならず余慶よけいあり
- 世間よは張はり物もの

<急せいては事を仕損じじる>

物事はあまりあせるとやり方が雑ざつになったり、注意力ちゆういりきが散漫さんまんになったりして、かえって失敗しぱいしやすいということ。気がはやくときほど落ち着おちつきいて考えて行動こうどうすべきであるという戒いまめ。

この諺は誰もが知っていると思うが、それはきっと昭和生まれの人に限られるのかもしれない。そこで、改めて紹介した。

不登校ふとうこうのお子さんを持つ保護者ほごしやとの面談めんだんでは、どの保護者ほごしやも少し休みやすみが続ついたところで、「どうしよう、不登校ふとうこうになってしまう」と焦あせり始める。今は不登校ふとうこうになってもいろいろな手段しゆうだんがあるので、焦あせる必要ひつやうはないし、焦あせれば焦あせるほど子どもこどもの状態じゆうたいは悪化あくわする。子どもこどもも本人ほんじんも焦あせっているときに、保護者ほごしやの焦あせりはそれをさらに焦あせらすことになるからである。保護者ほごしやの気持ちこころを受け止とめつつも、

まずは「どんと構えてもらう」ことが不登校では大事だ。不登校になったって人生が終わるわけではない。追い詰めてしまうほうがよほど危ない。「ことを仕損じない」ために、この諺はとても伝わりやすいと思ってたびたび使っている。

仕事を立て込んで慌てていると大抵失敗する。車の運転でも、急いでいるときほど事故を起しやすい。何事も焦らず、落ち着いて行動し、対応していくことで余計な問題を起こさずに済む。自分自身への戒めとしても、この諺は頻繁に使っている。

英語では・・・

Haste makes waste. (性急は無駄を生む)

The more haste the less speed. (急げば急ぐほど上手く行かない。)

<性に率う、之を道と謂う>

天から与えられた性質に従って行動することを、道というのだということ。

出典 中庸

自分自身の性質について、しっかり把握できている人はそう多くはないだろう。まして、相談に来る人は、自分を見失っていたり、自分を過大評価あるいは過小評価している人も多い。理想はあっても現実とのギャップは必ずある。そんな人に、この諺を使うことがある。

自分の悪い面ばかりは目立つが良い面に気づいていない時はそこに気づかせ、その良い面をどのように生かすかを検討するほうが、自分の性格を変えたいという目標に

向かって進むよりずっと簡単で合理的でもある。

兎角自分自身を過小評価しがちな日本人は、それを「謙遜」として美德ととらえがちだが、自分の良い面を生かせなければ人生辛く苦しくなるばかりである。自分の人生をどう謳歌するかは、自分の活かし方と関係が深いと思う。

「道」を極めるとはこういうことではないかと思っている。

<生年百に満たず、

常に千歳の憂いを懐く>

人間は百歳までも生きられないのに、いつも千年後のことまで心配している。若いこの時は今しかないのに、千年後の余計なことまで心配して過ごすのは愚かであるという意。 出典 文選

人生百年の時代に突入したとは言え、やはり百年生きられる人は少ない。ましてどんなに科学、医学が発達したとしても千年生きるのは SF の世界のような話で、仮死状態で冷凍保存でもしない限り無理だろう。今の時点では無理としか言えない。

しかし、人間というのは不安が強く、先々の心配をすることも多い。確かに地球温暖化や宇宙ゴミなどについては、もっと真剣に考えなければならない問題で、それはここ数十年の話でもある。

先のことを考えないで生きるのもどうかと思うが、これは、「若いうちは、そんな先のことより今を楽しみなさい」という諺である。

若さというのはいつまでも続くものではない。そんなことは誰もがわかっていることだが、相談に来る若者を見ると、今を楽しんでいない。というか楽しめない。不安が強く、積極性に欠けていたり、元気もなかったり、エネルギーがとにかく低い。20歳で死ぬとか、18歳で死ぬとか、そう言っているなら、今を精一杯楽しめばよいのに、毎日を辛い辛いと言いながら過ごしてあと数年で死にたいという。辛いから死にたいと思うのだろうが、どうせ死ぬならもっと楽しんでからにすればよいのと思う。

物事や人生を楽しめるかどうかは、多くが気持ちの問題である。楽しんでいる人と楽しんでいない人との違いは、どのくらいのことがあれば楽しいと思えるのかということと相関する。

道を歩いていて、かわいい雑草を見かけて、「かわいい」とか「きれい」とか感じられる人は、日々たくさんの楽しみや喜びを見つけられるだろう。空の色も、雲も、日差しも、木々の葉の色や香り、自然の移り変わり、なんでも感じて味わえればずっと楽しく幸せを感じられるだろう。しかし、死にたいとか辛いとか言っている人は、自分と自分を傷つける周囲のことしか見えていない。多くの人が自分を心配したり助けられようと思っていたり、優しく見守ってくれていたりするのだが、それに気付かないのである。

若いというだけでも、年取った身から見ればうらやましい限りである。無限の可能性を秘めた「若さ」をもっともっと楽しんでほしいと思うたびに、この諺を伝えている。古くから言われていることは、時には

こういう若者に響くことがあるから。

<生は難く死は易し>

苦しさ能耐えて生きていくことは難しいことであり、苦しさから逃れるために死を選ぶのは簡単なことであるということ。自分の命を絶つことによって事態の解決をはかろうとする態度を戒め、生命の尊さを教える言葉。

この言葉は、前掲の諺とも関係がある。生きることは苦難もあり、辛いこともたくさんある。しかし辛いことばかりではない。それでも辛さの真ただ中にいる人は、苦しく死にたいとってしまう。

コロナ禍のなか、自殺者、特に女性や十代の自殺者が増加した。有名人の自殺の影響もあっただろうが、なんといっても自殺が多い日本である。死んでしまえば楽になれると思うのは、短絡的だが、鬱状態ではある意味「死に取り付かれる」ということもある。鬱の患者さんに「死にたいなんて言うな」といってもそれは追い詰めるだけだろう。

「死」を考えたことが無い人というの少ないのではと思うくらい、「生」と「死」は背中合わせで、「死の誘惑」というものが時折微笑みかける。特に若い時はこの誘惑にかられることが多いように思う。

この誘惑と闘うには何が必要か？

人との信頼のおける繋がり、自分の存在感、自己肯定感等々いろいろあるだろう。今それが無いからと言って、永遠に得られないわけではないが、今見えないから、今

感じられないから「死」なのである。

そんな人に、この「諺」とともに伝えて
いることがある。今、大地を感じ、自分の
呼吸を感じ、心臓の鼓動を感じ、空気を感じ、
太陽の暖かさを感じてみよう。面倒
くさいことをすべて放って、気持ちの良い
ことだけを感じてみよう。何かを見つけ
られたらと思って。

＜性は猶湍水のごとし＞

人の本性は善にも悪にもなりうるという
ことのとえ。人間の生まれながらの性質
は、あたかもぐるぐる渦を巻いて流れる水
のようなものであるという意。

出典 孟子

前掲の諺でも伝えたが、自分の良いところ
というのを見つけられない人は多い。悪い
ところと良いところは表裏一体でもある。
そして、それが表を見せたり裏を見せたり
している。つまり渦のようにくるくる回っ
ているのである。それを知っていれば、他
人の言動についても、くるくる変わること
が当たり前であると感じられ、そうした言
動に振り回されずに済む。

他人を信じられないという人も多いが、
所詮他人に裏切られたり、言動をくるっと
替えられて、迷惑をこうむったとしても、
自分が他人に迷惑をかけなければよいので
はと思って生きていけば、なんてこともな
い。

＜精を得て麤を忘る＞

物事の真髓をつかんで、本質的なことに
関係ないことについては忘れてしまうこと。
中身の本質だけをとらえ、外形などにとら
われないことのとえ。 出典 列子

人間の記憶量には限界があるので、大事
なことだけ覚えればよいと考えることも
いえるが、それより、後半の説明の通り外
形などにとらわれないことという意味で使
っている。

最近の外見が素敵な人が増えている。ス
タイルも、顔も、整っている人が増えた分、
そうではない人の自己嫌悪感が増している。
少しぼっちゃりしているだけで、食事を抜
くとか、小学生でも無理なダイエットをす
るような時代だからこそ、もっと自分の見
た目ではなく中身で勝負できるようにして
いかねばと思う。そういう意味でこの諺を
使っている。難しいので子どもにはわかり
づらいが、子どもの見た目を気にする保護
者には効果があるように思う。

＜赤心を推して人の腹中に置く＞

真心をもって人に接し、相手を信じて少
しも疑わないこと。自分の真心を外に出し
て相手の腹の中に置く意から。赤心＝真心。
誠意。 出典 後漢書

人を疑わない、信じることができると、
人との関係は良くなる。しかし一回でも人
に裏切られると、人を信じることが怖くな
り、できなくなる。人を信じられないため
に、人との関わりが怖くなり、引きこもり

になっている人もいるし、友達を作らず孤立していて実は心が寂しがっているという人もいる。こうした人たちにこの諺を伝え、それで裏切られたら、その人には真心が通じないだけで、あなたのせいではないと伝えている。

昨今、悪い人がいるから、人を信じないようにと家庭でも学校でも子どもたちに伝えているが、もちろん子どもがさらわれたり被害に遭ったりする時代なので、そんな目に遭わないようにすることは大事だが、知らない人は怖いとか、信じるなとか言っていたら、いったいどうやって人間関係を作っていけばよいのか。

人は一人では生きていけない。真心をもって人と接していくことで、相手もその心に呼応してくれる人なら信頼できると思えるだろう。

「自分の真心を人の腹に置く」という表現が筆者としては気に入っている。

<積善の家には必ず余慶あり>

善行をたくさん積み重ねて来た者の家には、その報いとして必ず子孫にまで及ぶ幸福があるということ。余慶＝先祖の善行のおかげで子孫が受ける幸福。

出典 易経

易経には、これと正反対の諺もある。悪行を行っている家では子孫にまでその報いがあるというものである。両方を掲載しようかと思ったが、プラスのものの方が良いかなと思ってこちらを選んだ。

善い行いを続けていけばきっと良いこと

がおこる。そしてそれは子孫にまで及ぶと言われると、だれも悪い気はしないだろう。世の中は必ずしも公平ではないが、自分が正しい行いや、善い行いをしていると、悪い気分にはならないだろう。

その行動の結果が必ずしも良いものにならなくても、自分なりに満足感はあるものだ。誰かを恨んだり、羨んだり、人の悪いところばかりを見て過ごすよりもずっと心は穏やかできれいでいられるのではないだろうか。

そんな風に子どもたちに伝えている。

<世間は張り物>

世間を渡るには、ある程度の見栄を張るのも処世術の一つであるということ。又、人はみな見栄を張って生きているので、外見に騙されてはいけないという戒め。「世は張物」ともいう。張物＝芝居の大道具で、木材を骨にして紙や布などを張ったもの。

見た目については、今は化粧でもかなり化けられるし、美容整形も気軽にするようになった。口の達者な人は、自分を幾重にも大きく見せることもする。そういう人たちに、素直な人は、すぐに騙されてしまう。見た目も、話も、大体半分を受け止めると、まあそれほどの痛手は被らないだろう。特に素直な人がいるので、そういう人には、この諺を伝えている。北海道ではねぶたの様に、張物を作って学校祭を楽しむ高校なども多いので、張物のイメージは伝わりやすいなと感じている。

地で勝負できないというのもなんと情

けない話ではあるが、少しでもよく見せたいと思う気持ちは理解できる。ただ、あまりに作り過ぎると自分自身とのギャップにかえて苦しくなるのではと思う。作り過ぎている人にもこの諺を伝えることがある。あとで辛くなるくらいなら、今のうちに正直に自分を出そうと。

出典説明

中庸・・・一巻

儒教の教典。『論語』『孟子』『大学』とともに四書の一つ。孔子の孫^し思^しの著と伝えられるが、異説も多い。喪とは『礼記』の一編だったが、宋代にそれを一書に独立させた。天と人を結ぶ奥深い原理を説いたものとして、儒学入門の必読書となった。

文選・・・三十巻

中国の詩文集。梁の昭明太子^{しょうめいたいし}蕭統^{しょうとう}が編纂。古代の周から南北朝の梁までの約千年間の作家百三十余人による八百首近いすぐれた作品が、文体別・時代順に編集されている。奈良時代に日本に伝来し『白紙文集^{もんしゅう}』とともに、日本の文学に大きな影響を与えた。

孟子・・・七編

中国、戦国時代中期の思想書。孟子の言行を門人が編纂したもので、「大学」「中庸」「論語」と共に四書の一つ。性善説に基づく道徳論を説き、霸道（武力による政治）を否定して王道（人徳による政治）を提唱している。

後漢書・・・百二十巻

中国の正史の一つ。南朝、宋の范曄^{はんぷ}と西晋の司馬彪^{ひょう}の撰。後漢一代の歴史を記したもので、本紀（帝王の伝記）・列伝（臣下などの伝記）は范曄の撰に唐の李賢^{りけん}が注を加え、志（社会・文化など）の部分は梁の劉昭^{りゅうしょう}が司馬彪の「続漢書」からとったもので注も加えている。志の「東夷伝^{とういでん}」には日本についての記述がある

列子・・・八巻

中国、戦国時代の思想家。名は禦寇^{ぎこう}。老子よりあと、荘子より前の時代の道家といわれ、虚の道を得た哲人と伝えられるが不詳。『列子』八巻の著者とされるが異説も多い。

易経・・・十二編

周代の占いの書。儒教の五経の一つ。経文との解説書の「十翼^{じゅうよく}」を合わせて十二編より成る。陰と陽を組み合わせて八卦、これを重ねた六十四卦によって、自然と人間の変化の法則を説いた書で、中国の哲学思想のもとになった。作者として、周の文王^{ぶんおう}、周公^{しゅうこう}、孔子があげられるが確かではない。